

## 問題 6

次の記述のうち、我が国の「原価計算基準」に照らして正しいものの組合せとして最も適切な番号を一つ選びなさい。(5点)

ア. 総合原価計算では、当期製造費用および期首仕掛品原価を、先入先出法などの方法により、完成品と期末仕掛品とに分割して、完成品総合原価を計算する。なお、加工費について期末仕掛品の完成品換算量を計算することが困難な場合であっても、当期の加工費総額は、すべてこれを完成品に負担させることができない。

イ. 等級別総合原価計算は、同一工程において、同種製品を連続生産するが、その製品を形状、大きさ、品位等によって等級に区別する場合に適用する。等級別総合原価計算では、各等級製品について適当な等価係数を定め、一期間における完成品の総合原価又は一期間の製造費用を等価係数に基づき各等級製品にあん分してその製品原価を計算する。

ウ. 工程別総合原価計算において、原料がすべて最初の工程の始点で投入され、その後の工程では、単にこれを加工するにすぎない場合には、各工程別に一期間の加工費を集計し、それに原料費を加算することにより、完成品総合原価を計算する。この方法を加工費工程別総合原価計算という。

エ. 連産品とは、同一工程において同一原料から生産される異種の製品であって、相互に主副を明確に区別できないものをいう。連産品の価額は、連産品の正常市価等を基準として定めた現価係数に基づき、一期間の総合原価を連産品にあん分して計算する。

1. アイ      2. アウ      3. アエ      4. イウ      5. イエ      6. ウエ

## 問題 6

次の記述のうち、我が国の「原価計算基準」に照らして正しいものの組合せとして最も適切な番号を一つ選びなさい。(5点)

ア. 単純総合原価計算は、同種製品を反復連続的に生産する生産形態に適用する。単純総合原価計算にあつては、一原価計算期間に発生したすべての原価要素を集計して当期製造費用を求め、これに期首仕掛品原価を加え、この合計額を、完成品と期末仕掛品とに分割計算することにより、完成品総合原価を計算し、これを製品単位に均分して単位原価を計算する。

イ. 等級別総合原価計算は、同一工程において、同種製品を連続生産するが、その製品を形状、大きさ、品位等によって等級に区別する場合に適用する。等級別総合原価計算にあつては、各等級製品について適当な等価係数を定め、一期間における完成品の総合原価又は一期間の製造費用を等価係数に基づき各等級製品にあん分してその製品原価を計算する。

ウ. 組別総合原価計算は、異種製品を組別に連続生産する生産形態に適用する。組別総合原価計算にあつては、一期間の製造費用を組直接費と組間接費又は原料費と加工費とに分け、等級別総合原価計算に準じ、組直接費又は原料費は、各組の製品に賦課し、組間接費又は加工費は、適当な配賦基準により各組に配賦する。次いで一期間における組別の製造費用と期首仕掛品原価とを、当期における組別の完成品とその期末仕掛品とに分割することにより、当期における組別の完成品総合原価を計算し、これを製品単位に均分して単位原価を計算する。

エ. 個別原価計算は、種類を異にする製品を連続的に生産する生産形態に適用する。個別原価計算にあつては、特定製造指図書について個別的に直接費および間接費を集計し、製品原価は、これを当該指図書に含まれる製品の生産完了時に算定する。経営の目的とする製品の生産にさいしてのみでなく、自家用の建物、機械、工具等の製作又は修繕、試験研究、試作、仕損品の補修、仕損による代品の製作等にさいしても、これを特定指図書を発行して行なう場合は、個別原価計算の方法によってその原価を算定する。

1. アイ      2. アウ      3. アエ      4. イウ      5. イエ      6. ウエ

平成29年第Ⅱ回短答式管理会計論

問題 5

副産物に関する次の記述のうち、我が国の「原価計算基準」に照らして正しいものの組合せとして最も適切な番号を一つ選びなさい。(5点)

ア. 副産物で、そのまま外部に売却できるものは、見積売却価額から販売費および一般管理費又は販売費、一般管理費および通常の収益の見積額を控除した額を副産物の価額とする。

イ. 副産物で、加工の上売却できるものは、加工製品の見積売却価額から加工費、販売費および一般管理費又は加工費、販売費、一般管理費および通常の利益の見積額を控除した額を副産物の価額とする。

ウ. 副産物でそのまま自家消費されるものは、これによって節約されるべき物品の見積購入価額を副産物の価額とする。

エ. 副産物で、加工の上自家消費されるものは、これによって節約されるべき物品の見積購入価額から一般管理費の見積額を控除した額を副産物の価額とする。

1. アイ      2. アウ      3. アエ      4. イウ      5. イエ      6. ウエ

平成30年第Ⅰ回短答式管理会計論

問題 5 次の記述のうち、我が国の「原価計算基準」に基づいて正しいものの組合せを示す番号を一つ選びなさい。(5点)

ア. 単純総合原価計算、等級別総合原価計算および組別総合原価計算は、いずれも原価集計の単位が期間投入量であることを特質とする。すなわち、いずれも継続製造指図書に基づき、一期間における投入量について総製造費用を算定し、これを期間投入量に集計することによって完成品総合原価を計算する点において共通する。

イ. 総合原価計算において、必要ある場合には、一期間における製造費用のうち、変動直接費および変動間接費のみを部門に集計して部門費を計算し、これに期首仕掛品を加えて完成品と期末仕掛品とにあん分して製品の直接原価を計算し、固定費を製品に集計しないことができる。この場合、会計年度末においては、当該会計期間に発生した固定費額は、これを期末の仕掛品および製品とに配賦する。

ウ. 総合原価計算において、製造工程が二以上の連続する工程に分けられ、工程ごとにその工程製品の総合原価を計算する場合(この方法を「工程別総合原価計算」という。)には、一工程から次工程へ振り替えられた工程製品の総合原価を、前工程費又は原料費として次工程の製造費用に加算する。この場合、工程間に振り替えられる工程製品の計算は、予定原価又は正常原価によることができる。

エ. 等級別総合原価計算は、同一工程において、同種製品を連続生産するが、その製品を形状、大きさ、品位等によって等級に区別する場合に適用する。等級別総合原価計算にあつては、各等級製品について適当な等価係数を定め、一期間における完成品の総合原価又は一期間の製造費用を等価係数に基づき各等級製品にあん分してその製品原価を計算する。

1. アイ      2. アウ      3. アエ      4. イウ      5. イエ      6. ウエ

平成31年第Ⅰ回短答式管理会計論

問題 5

次の記述のうち、我が国の「原価計算基準」に照らして正しいものの組合せとして最も適切な番号を一つ選びなさい。(5点)

- ア. 総合原価計算において仕損品が生じた場合には、その売却収入を原価計算に反映しなければならず、原価計算外の収益とすることはできない。
- イ. 工程別総合原価計算において、各工程の製造費用をもってそのまま各工程の完成品総合原価とすることがありうる。
- ウ. 総合原価計算において、期首仕掛品がない場合には、平均法、先入先出法、後入先出法による期末仕掛品原価は同一となる。
- エ. 等級別総合原価計算において、必要がある場合には、等級品の一種又は数種の価額を副産物に準じて計算し、これを一期間の総合原価から控除した額をもって他の等級品の価額とすることができる。

1. アイ      2. アウ      3. アエ      4. イウ      5. イエ      6. ウエ

平成31年第Ⅰ回短答式管理会計論

平成23年第Ⅰ回短答式管理会計論

問題5

当工場では製品Aを製造・販売し、実際総合原価計算を実施している。次の〔資料〕に基づき、通常の修正先入先出法により算定した当月完成品単位原価と、純粋先入先出法により月初仕掛品完成分と区別して算定した当月着手完成分の単位原価の差額として、正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。なお、計算過程で端数が生じる場合は、少数点以下第3位を四捨五入する。

〔資料〕

1. 生産データ

|       |            |
|-------|------------|
| 月初仕掛品 | 800個(0.25) |
| 当月投入  | 5,200個     |
| 正常仕損品 | 300個(0.4)  |
| 異常仕損品 | 200個(0.5)  |
| 月末仕掛品 | 500個(0.8)  |
| 完 成 品 | ?個         |

( ) 内は加工進捗度を示している。

2. 原価データ

|         |            |
|---------|------------|
| 月初仕掛品原価 |            |
| 直接材料費   | 632,000円   |
| 加 工 費   | 90,000円    |
| 当月製造費用  |            |
| 直接材料費   | 4,368,000円 |
| 加 工 費   | 2,655,800円 |

3. 計算条件

- (1) 材料はすべて工程の始点で投入している。
- (2) 仕損費の処理は非度外視法による。
- (3) 仕損品はすべて当月投入分から発生し、100個当たり4,375円で売却可能であり、直接材料費から控除する。なお、異常仕損品に関しては売却価値はないものとする。
- (4) 仕損費の処理は、仕損品の発生時点と仕掛品の進捗度により判断する。

1. 19.32円      2. 19.83円      3. 22.00円      4. 41.43円      5. 63.61円

平成23年第Ⅱ回短答式管理会計論

- 問題 8 当工場では、連産品 X、Y、Z を生産し、更にこれらをそれぞれ加工の上販売している。次の〔資料〕に基づき、分離前の連結原価として正しい番号を一つ選びなさい。なお、計算過程で端数が生じた場合は円未満を四捨五入する。

〔資料〕

1. 製品別データ

|      | 生産数量<br>(トン) | 正常売価<br>(円/トン) | 分離後の個別正常加工費<br>(円) |
|------|--------------|----------------|--------------------|
| 製品 X | (各自計算)       | 12,000         | 200,000,000        |
| 製品 Y | 40,000       | 6,000          | 40,000,000         |
| 製品 Z | 60,000       | 7,000          | 20,000,000         |

2. 製品別損益データ

(単位：円)

|       | 製品 X          | 製品 Y       | 製品 Z       |
|-------|---------------|------------|------------|
| 売上高   | 1,200,000,000 | (各自計算)     | (各自計算)     |
| 売上原価  | (各自計算)        | (各自計算)     | (各自計算)     |
| 売上総利益 | 232,500,000   | 42,500,000 | 85,000,000 |

3. 計算条件

- (1) 連産品 Y、Z の個別加工費の実際額は、正常加工費と同額であったが、連産品 X の個別加工費の実際額は正常加工費よりも 20,000,000 円少なかった。
- (2) 連結原価の按分は市価基準を採用している。
- (3) 生産数量はすべて正常売価で販売済みである。

1. 1,240,000,000 円
2. 1,260,000,000 円
3. 1,290,000,000 円
4. 1,340,000,000 円
5. 1,360,000,000 円

平成24年第 I 回短答式管理会計論

- 問題 7 当工場では、等級別製品MとLを生産しており、等級別総合原価計算を実施している。  
次の〔資料〕に基づき、製品Mの完成品単位原価として正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。

〔資料〕

1. 生産データ

|       | 製品M         | 製品L         |
|-------|-------------|-------------|
| 月初仕掛品 | 300 個 (0.7) | 200 個 (0.4) |
| 当月投入  | 5,300 個     | 5,100 個     |
| 正常仕損品 | 50 個        | —           |
| 異常仕損品 | 100 個       | —           |
| 月末仕掛品 | 500 個 (0.6) | 300 個 (0.3) |
| 当月完成品 | 各自計算        | 各自計算        |

( )内は加工進捗度を示している。

2. 原価データ

|        | 製品M        | 製品L      |
|--------|------------|----------|
| 月初仕掛品  |            |          |
| 直接材料費  | 4,500 千円   | 5,000 千円 |
| 加工費    | 15,120 千円  | 7,200 千円 |
| 当月製造費用 |            |          |
| 直接材料費  | 165,600 千円 |          |
| 加工費    | 912,200 千円 |          |

3. 等価係数

|       | 製品M | 製品L |
|-------|-----|-----|
| 直接材料費 | 0.6 | 1   |
| 加工費   | 0.8 | 1   |

4. 計算条件

- (1) 材料はすべて工程の始点で投入している。
- (2) 仕掛品の評価は先入先出法による。
- (3) 仕損品はすべて当月投入分から発生している。正常仕損品は工程の終点で発生し、その見積売却可能価額は総額で1,200 千円である。異常仕損品は加工進捗度50 %時点で発生し、その売却価値はない。
- (4) 仕損費の処理は、仕損品の発生時点と仕掛品の進捗度により判断する。
- (5) 等級別計算は、当月製造費用を等価係数によって各製品に按分する方法による。
- (6) 計算過程で端数が生じる場合は円未満を四捨五入すること。

1. 91,604 円
2. 91,721 円
3. 91,844 円
4. 92,529 円
5. 92,772 円

平成24年第Ⅱ回短答式管理会計論

問題 8

当社は製品Xを製造販売し、累加法による工程別総合原価計算を採用している。製品Xは、第1工程と第2工程を経て完成する。第1工程では、工程始点で原料Aを、また工程を通じて平均的に原料Bを投入して加工する。第2工程では、第1工程完成品を加工するが、工程を通じて平均的に原料Cを投入して加工する。次の〔資料〕に基づき、製品Xの売上総利益として正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。

〔資料〕

1. 各工程の生産データ

|       | 第1工程       | 第2工程       |
|-------|------------|------------|
| 月初仕掛品 | 600個 (1/3) | 600個 (2/3) |
| 当月投入  | 3,400      | 3,200      |
| 月末仕掛品 | 800 (1/2)  | 400 (1/2)  |
| 正常仕損品 | 0          | 200        |
| 完成品   | 3,200個     | 3,200個     |

( )内は加工進捗度を示している。

2. 月初仕掛品の原価データ

(1) 第1工程月初仕掛品原価

原料費：原料A 692,000円 原料B 250,000円

加工費：460,000円

(2) 第2工程月初仕掛品原価

原料費：原料C 40,000円

加工費：520,000円

前工程費：2,770,000円

3. 当月の原価データ

原料費：原料A 4,012,000円 原料B 4,250,000円 原料C 320,000円

加工費：第1工程 7,820,000円 第2工程 4,160,000円

4. 製品Xの販売データなど

月初在庫量 1,000個 月初製品の単位当たり原価 6,500円/個

当月販売量 3,400個 販売単価 9,000円/個

5. 計算条件

(1) 各工程の完成品と月末仕掛品への原価配分および製品の庫出単価の計算には先入先出法を用いる。

(2) 正常仕損は第2工程の終点で発生する。仕損費は適切な方法で良品に負担させる。

(3) 計算過程で端数が生じる場合は円未満を四捨五入しなさい。

1. 8,530,000円      2. 8,545,000円      3. 8,695,000円  
4. 8,857,125円      5. 8,873,125円

平成25年第 I 回短答式管理会計論

問題 7

当工場では、まず連産品A・Bが生産され、工程の終点で分離後、各々追加加工が施され連産品Aは製品Aとして、連産品Bは製品Bとして全て完成品となる。追加加工工程において、月初仕掛品はない。次の〔資料〕に基づき、実際原価計算による当月の製品Bの完成品総合原価として正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。

〔資料〕

1. 連産品の生産データ

|           |                              |
|-----------|------------------------------|
| 月 初 仕 掛 品 | 10 kg (0.2)                  |
| 当 月 投 入   | 300 kg                       |
| 仕 損 品     | 各自計算                         |
| 月 末 仕 掛 品 | 50 kg (0.4)                  |
| 当 月 完 成   | 連産品A：100 kg      連産品B：125 kg |

(注) (1) ( )内は加工進捗度を示している。

(2) 仕損品のうち、25 kg は正常仕損品である。

2. 連産品の原価データ

|             |             |             |
|-------------|-------------|-------------|
|             | 原 料 費       | 加 工 費       |
| 月 初 仕 掛 品   | 100,000 円   | 30,000 円    |
| 当 月 製 造 費 用 | 2,700,000 円 | 3,892,000 円 |

3. 製品データ

|     |           |           |             |
|-----|-----------|-----------|-------------|
|     | 分離後の正常個別費 | 分離後の実際個別費 | 販売単価        |
| 製品A | 250,000 円 | 250,000 円 | 20,000 円/kg |
| 製品B | 500,000 円 | 450,000 円 | 30,000 円/kg |

(注)分離後追加加工による各製品生産量の変化はない。

4. 計算条件

- (1) 原料はすべて工程の始点で投入している。
- (2) 仕掛品の評価方法は先入先出法による。
- (3) 仕損品は当月投入分からのみ工程の終点で発生し、仕損品の評価額はゼロである。正常仕損費の計算は非度外視法によるものとし、その処理は仕損品の発生時点と仕掛品の進捗度により判断する。なお、異常仕損費は正常仕損費を負担しない。
- (4) 連結原価は正常市価基準によって連産品に配賦する。
- (5) 計算過程で端数が生じる場合は円未満を四捨五入する。

1. 3,482,632 円      2. 3,821,550 円      3. 4,195,300 円
4. 4,270,050 円      5. 4,344,800 円

平成25年第Ⅱ回短答式管理会計論

問題 6

当工場では、単一の化学製品を連続する二つの製造工程において製造し、累加法による工程別総合原価計算を実施している。第一工程の始点で原料を投入し、これを加工し完成させ、全量を第二工程に振り替えている。第二工程では、前工程完成品と同量の溶液を工程の始点で加えて加工し製品を完成させている。次の〔資料〕に基づき、第二工程の完成品原価として適切な番号を一つ選びなさい。

〔資料〕

1. 各工程の当月生産データ

|       | 第一工程          | 第二工程          |
|-------|---------------|---------------|
| 月初仕掛品 | 3,500 ㍻ (0.2) | 3,000 ㍻ (0.8) |
| 当月投入  | 49,500 ㍻      | 各自計算          |
| 減損    | 500 ㍻         | —             |
| 月末仕掛品 | 2,500 ㍻ (0.6) | 4,000 ㍻ (0.3) |
| 完成品   | 各自計算          | 各自計算          |

(注) ① ( )内は加工進捗度を示している。

② 第二工程において追加投入された原料分だけ全体の数量は増加する。

2. 各工程の当月原価データ(一部抜粋)

|        | 第一工程      | 第二工程      |
|--------|-----------|-----------|
| 月初仕掛品  |           |           |
| 原料費    | 4,095 千円  | 1,350 千円  |
| 直接労務費  | 710 千円    | 1,600 千円  |
| 前工程費   | —         | 4,050 千円  |
| 当月製造費用 |           |           |
| 原料費    | 58,905 千円 | 44,850 千円 |
| 直接労務費  | 50,790 千円 | 78,560 千円 |

3. その他の計算条件

- (1) 仕掛品の評価は平均法を採用している。
- (2) 第一工程において蒸発によって工程全体を通じて平均的に歩減りが生じているが、その歩留率は正常である。
- (3) 減損の処理は、わが国の「原価計算基準」に示される方法を採用している。
- (4) 製造間接費は直接労務費の40%を予定配賦している。
- (5) 計算過程で端数が生じる場合は、千円未満を四捨五入する。

1. 264,906 千円
2. 284,130 千円
3. 308,596 千円
4. 319,220 千円
5. 331,220 千円

平成25年第Ⅱ回短答式管理会計論

平成26年第 I 回短答式管理会計論

問題 7

当工場では、等級別製品 A と B を製造しており、等級別総合原価計算を実施している。材料  $\alpha$  は工程の始点で投入し、材料  $\beta$  は工程の加工費進捗度 60 % の時点から終点まで平均的に追加投入し、これを加工し完成させている。なお、材料  $\beta$  の追加投入による生産量の増量はない。次の〔資料〕に基づき、製品 A の当月完成品総合原価として適切な番号を一つ選びなさい。(6 点)

〔資料〕

1. 生産データ

|       | 製品 A        | 製品 B        |
|-------|-------------|-------------|
| 月初仕掛品 | 60 個 (0.5)  | 100 個 (0.7) |
| 当月投入  | 各自計算        | 各自計算        |
| 正常仕損品 | 20 個        | —           |
| 月末仕掛品 | 100 個 (0.5) | 200 個 (0.8) |
| 当月完成品 | 3,000 個     | 2,000 個     |

(注) ① ( ) 内は加工費進捗度を示している。

② 正常仕損はすべて当月投入分から発生し、工程の終点の検査ポイントで発見された。

2. 原価データ

|              |                | 製品 A         | 製品 B      |
|--------------|----------------|--------------|-----------|
| 月 初<br>仕 掛 品 | 直接材料費 $\alpha$ | 7,560 千円     | 21,000 千円 |
|              | 直接材料費 $\beta$  | —            | 10,250 千円 |
|              | 加 工 費          | 6,720 千円     | 19,600 千円 |
| 当 月<br>製造費用  | 直接材料費 $\alpha$ | 787,200 千円   |           |
|              | 直接材料費 $\beta$  | 1,554,800 千円 |           |
|              | 加 工 費          | 1,356,600 千円 |           |

3. 等価係数

|                                | 製品 A | 製品 B |
|--------------------------------|------|------|
| 直接材料費 $\alpha$ , 直接材料費 $\beta$ | 0.6  | 1    |
| 加 工 費                          | 0.8  | 1    |

4. 計算条件

- (1) 仕掛品の評価は先入先出法による。
- (2) 仕損品の売却価値はない。仕損費の処理は、仕損品の発生時点と仕掛品の加工費進捗度により判断する。
- (3) 当月製造費用は等価係数によって各製品に按分する。
- (4) 計算過程で端数が生じる場合は、千円未満を四捨五入する。

1. 1,756,339 千円
2. 1,799,306 千円
3. 1,811,880 千円
4. 1,855,287 千円
5. 1,899,159 千円

平成27年第Ⅱ回短答式管理会計論

問題 6

当社は親会社より無償支給された原料を、すべて工程の始点で投入し部品Aを生産している。下記の〔資料〕に基づいて、ア～エの記述のうち正しいものの組合せを示す番号を一つ選びなさい。なお、計算過程で端数が生じる場合は、小数点第2位を四捨五入する。(7点)

〔資料〕

|           |                 |               |
|-----------|-----------------|---------------|
| 当月投入原料    | 14,500 kg       |               |
| 月 末 仕 掛 品 | 7,500           | (加工費進捗度 40 %) |
| [ B ]     | <u>1,000</u>    |               |
| 完 成 品 A   | <u>6,000</u> kg |               |
| 当月加工費     | 79,515,000 円    |               |

- ア. Bが正常減損で、工程の始点から終点に至るまで平均的に発生した場合、非度外視法によって計算した月末仕掛品原価は26,505,000円である。
- イ. Bが正常減損で、工程の始点から終点に至るまで平均的に発生した場合、非度外視法によって計算した完成品総合原価は52,080,000円である。
- ウ. Bが完成品Aとともに工程の終点で分離される連産品であり、親会社は完成品Aを1kg当たり8,400円、完成品Bを1kg当たり12,600円で買い取る場合、完成品Aの完成品総合原価は44,528,400円である。
- エ. Bが完成品Aとともに工程の終点で分離される連産品であり、親会社は完成品Aを1kg当たり8,400円、完成品Bを1kg当たり12,600円で買い取る場合、完成品Bの完成品総合原価は11,319,000円である。

1. アイ      2. アウ      3. アエ      4. イウ      5. イエ      6. ウエ

平成27年第Ⅱ回短答式管理会計論

平成30年第Ⅱ回短答式管理会計論

問題 6

当工場では、等級製品Aと等級製品Bとを生産し、実際等級別総合原価計算を採用している。次の〔資料〕に基づき、等級製品Bの原料費および加工費の等価係数の数値の組合せとして最も適切なものの番号を一つ選びなさい。なお、計算過程で端数が生じる場合、計算途中では四捨五入せず、最終数値の円未満を四捨五入すること。(8点)

〔資料〕

1. 生産データ

(単位：個)

|       | 等級製品A        | 等級製品B        |
|-------|--------------|--------------|
| 月初仕掛品 | 20,000(0.25) | 10,000(0.75) |
| 当月投入  | 180,000      | 140,000      |
| 正常仕損  | 500          | —            |
| 月末仕掛品 | 24,500(0.5)  | 20,000(0.2)  |
| 完成品   | 175,000      | 130,000      |

(注) ( )内の数値は、加工費進捗度を示している。

2. 原価データ

(単位：円)

|        | 等級製品A      | 等級製品B     | 合 計        |
|--------|------------|-----------|------------|
| 月初仕掛品  |            |           |            |
| 原料費    | 1,247,500  | 492,000   | 1,739,500  |
| 加工費    | 215,000    | 258,000   | 473,000    |
| 計      | 1,462,500  | 750,000   | 2,212,500  |
| 当月製造費用 |            |           |            |
| 原料費    | 各自算定       | 各自算定      | 各自算定       |
| 加工費    | 各自算定       | 各自算定      | 各自算定       |
| 完成品    |            |           |            |
| 原料費    | 9,800,000  | 5,772,000 | 15,572,000 |
| 加工費    | 7,035,000  | 3,688,000 | 10,723,000 |
| 計      | 16,835,000 | 9,460,000 | 26,295,000 |

3. 等価係数(等級製品Aに対する比率)

|     | 等級製品A | 等級製品B |
|-----|-------|-------|
| 原料費 | 1     | 各自算定  |
| 加工費 | 1     | 各自算定  |

## 4. 計算条件

- (1) 原料は工程の始点で投入され、等価係数は原料費と加工費とに区分している。
- (2) 完成品と月末仕掛品への製造原価の按分は先入先出法によっている。
- (3) 正常仕損は、工程の終点で当月投入分のみから発生し、処分価額はない。

|    | 原料費の等価係数 | 加工費の等価係数 |
|----|----------|----------|
| 1. | 0.6      | 0.6      |
| 2. | 0.6      | 0.7      |
| 3. | 0.7      | 0.5      |
| 4. | 0.7      | 0.8      |
| 5. | 0.8      | 0.6      |
| 6. | 0.8      | 0.7      |

問題 6

当工場はX年3月に完成し、本稼働を開始した。当工場は単一製品を連続する二つの製造工程において製造し、累加法による工程別総合原価計算を行っている。第一工程の始点で原料を投入し、これを加工して完成する中間製品の全量を第二工程に振り替えた後、第二工程で追加加工を行い、最終製品を生産している。

次の〔資料〕に基づき、X年3月の最終製品の完成品単位原価として最も適切なものの番号を一つ選びなさい。なお、計算過程で端数が生じる場合、計算途中では四捨五入せず、最終数値の千円未満を四捨五入すること。(8点)

〔資料〕

1. X年3月の生産状況(製造日報から抜粋)

3月1日：第一工程に原料10,000 kgを投入し、加工開始。

3月4日：原料投入量の10%に相当する仕損が発生した。仕損の加工費進捗度は20%。予期した仕損ではなく、原因は不明。仕損品は全量廃棄した。

3月5日：仕損の発生原因は操業開始に伴う一時的な電源トラブルによるものであることが判明したため、発生した仕損は異常仕損として扱う。

3月14日：3月4日以降に仕損は発生していない。再発防止のため第一工程の電源装置を改修すべく、第一工程の生産を本日から3月末まで止めることとした。本日時点で完成している中間製品を第二工程に振り替えた。第一工程に残留する仕掛品は3,000 kg、加工費進捗度は60%。

3月15日：第二工程での製造開始。予期せぬトラブルによる損失を最小化するため、三つのバッチに分けて第二工程の製造を行うこととした。第一バッチ、第二バッチ、第三バッチの中間製品投入量は、1：2：3の比率とした。

3月16日：第二工程では、減損が発生している。工程を通じて加工進捗に応じて発生し、工程終点では中間製品投入量の10%に達する予定。工程の特性に応じた減損であり、生産計画にも反映済みであるため、正常減損として扱う。

3月31日：第一バッチ、第二バッチは完成したが、第三バッチは加工費進捗度80%で仕掛中。第二工程の減損は予定どおりの発生状況であり、仕損は発生していない。

2. 当月の原価データ

|     | 第一工程         | 第二工程         |
|-----|--------------|--------------|
| 原料費 | 260,000 千円   | —            |
| 加工費 | 1,000,000 千円 | 2,061,600 千円 |

3. 計算条件

正常減損は、バッチ毎に加工費進捗度に基づいて完成品と仕掛品へ負担させることとする。

1. 529 千円    2. 559 千円    3. 579 千円    4. 588 千円    5. 590 千円